

ルーントルーパーズ 自衛隊漂流戦記

主な登場人物 MAIN CHARACTERS

ラロナ

マリースアの飛行軽甲
戦士団の練戦士。
巨鳥のデールが相棒。

ハミエーア

マリースア南海連合
王国の女王。
幼いながらも王としての
威厳を備えている。

リヒャルダ

フィルボルグ継承
帝国軍の将軍。
マリースア侵攻の
指揮を執る。

かぶらぎのりお 無木紀夫

海上自衛隊海将補にして、
艦隊の最高責任者。
現場主義が災いし、
出世コースから外れる。

カルダ

マリースアの飛行軽甲
戦士団の団長。
婚約者に先立たれた
過去を持つ。

くぜひろゆき 久世啓幸

陸上自衛隊三等陸尉。
偵察部隊を率いて、
マリースアへ赴く。
最近、失恋をした。

ゲンフル

帝国軍に随行する
魔術師。

いちのせりゅうじ 市之瀬竜治

久世の部下で二等陸士。
小隊では狙撃手を務めている。
若くて生意気。

目次

序章	依巫 ^{よりまし}	7
第1章	派遣艦隊出航	10
第2章	アルゲンタビス	31
第3章	発砲	110
第4章	戦火の中で	148
第5章	流星の目	205
第6章	生きる者達への賛歌	242
終章	平和の風	283

序章 依巫

朽ちかけた神殿に、入口の扉を破ろうとする重い音が響いていた。

神殿の最深部である円形の洞窟内広場にも、それは聞こえてくる。

傷つき、疲れ切った騎士達の表情には、諦観が見て取れた——もう結末は覆しようがない、自分達にできたのは、それをほんの少しだけ引き延ばしたぐらいだ、と。

皇都が敵の手に落ち、敗残兵をまとめてこの山麓の神殿に立てこもり六日になるが、とうとう正門を突破されようとしている。

じきにここにも敵が雪崩れ込んでくるだろう。

五百年にわたって栄華を誇ってきた神聖プロミニア帝国も、今は無惨な最後を待つばかりだった。既に神皇帝は玉座になく、精鋭と謳われた近衛聖騎士団もそのほとんどが魔物の腹の中へ収まっていた。この洞窟を出れば、まだ燃え上がる皇都の赤い夜景を見ることができようだろう。

「ここが落ちるのも時間の問題か……」

「ならば計画を実行に移さねばなるまい」

光魔法の灯るランプの微かな明かりで照らされた広場では、老若男女が静かな絶望と狂気を宿し

た表情で話し合っていた。

彼らは、騎士達よりも前に神殿に逃げ込んだ人々である。拜月神に仕える高位の神官や魔法学院の老練な魔導師など、一流の魔法を操ることができる者ばかりだった。

既に死は覚悟している。

しかし、ただで滅びるわけにはいかない。そんな潔さは彼らにはなかった。

一人の男が、重く感情のこもらない声を広場の中央にある祭壇へ投げかける。

「よいな？ ヒュムナ」

しゃがれたその声は、有無を言わさぬ力があつた。

「はい……」

祭壇の上には依巫が静かに座っている。

依巫はまだ若い年頃の少女であつた。

微かに身体の線が透けて見える白く薄い羽衣に身を包み、声をかけられてなお、深く祈るような

表情のまま手を合わせている。

有翼の民の末裔である証の白い翼を有し、人形と見紛わんばかりのどこか作り物めいた美しさを備えていた。

ここにいる者たちが今実行しようとしているのは、外道の行いである。

だが、滅びゆく者にとって、それは希望に他ならなかった。

戦場が、殺戮の宴が、一步一步近づいてくる。

黒いローブを纏い、フードで顔を隠した魔術師たちが、中央の祭壇を囲むように等間隔に並んだ。全員が静かに同一の言葉を唱える。

それらは洞窟内に反響し、集まり、うねり、混じり合っていく。

『虚空の狭間をたゆたう光よ』

じわり、と依巫の身体に刻まれた文様から鮮血が滲んだ。

『現世と冥界を繋ぐ番兵に投げかけん』

少女が苦悶の表情を浮かべる。

『有翼の民の血を対価としてここに願わん』

少女の真下にある魔法陣は、溢れ出る彼女の血を吸う。

『この世界へ異空の代償を示したまえ！』

詠唱の完了と同時に、広場に敵が殺到した。

それからここで起こったのは、一方的な戦いであつた。

いや、虐殺と言ふべきだろう。

騎士達は戦う気力を失っており、ローブ姿の者たちは扱う武器がない。彼らは、次々と乱入する人外の軍団により倒れていった。抵抗らしい抵抗もしない。

しかしその時、倒れ伏す者の顔には絶望以外の感情が宿っていた。そのことに気づく敵兵はいない。死体は、フードの奥で歪んだ笑みを浮かべ、誰もいなくなった祭壇に虚ろな視線を向けていた。

第1章 派遣艦隊出航

その日の神奈川県横浜須賀市は、曇り時々雨といった空模様だった。

出港するには、幾分か気が滅入る天気である。

陸上自衛隊に所属する久世啓幸は、部下と共に輸送艦の縁に糸乱れぬ姿で整列し、眼下の海上自衛隊横須賀基地を見下ろしていた。輸送艦の甲板は、四階建てのビルと同じくらいの高さがあるため、埠頭にいる人々の様子が一望できる。

彼の頬を、小雨が撫でた。

埠頭にいる、テレビ局の女性レポーターの甲高い声が聞こえる。

「はい！こちら海上自衛隊横須賀基地です！ たった今、艦隊が出航しました！ 国際協力と言われているのですが、実質は国連平和維持軍、いわゆる国連軍へ参加する艦隊の出航です！」

わざと緊迫した口調で話しているのが、久世にもよく分かった。

おそらく夕方のニュースでは、物々しいBGMつきで、自衛隊が海外へ“派兵”されていく様子をとり上げるのだろう。

「今回出航するのは、海上自衛隊の最新鋭イージス艦一隻に守られた輸送艦や補給艦、合計五隻

から成る艦隊です。輸送艦に搭乗する陸上自衛隊部隊も、最新鋭戦車や戦闘ヘリを携行するという過去の派遣に例のない“実戦部隊”を思わせる陣容となっています”

女性レポーターは、レインコートを着た姿で離岸間もない艦隊を振り返り、カメラに示した。

「弾道ミサイル迎撃艦として建造された最新鋭イージス護衛艦“いぶき”を旗艦とする、完全武装した自衛隊の海外派遣。派遣先のアフリカにおいて、“北”が密輸出した可能性が指摘されている弾道ミサイルが反政府軍により発射された場合、“いぶき”は国際法に則ってこれを撃墜する任務を負います”

レポーターはフリップを取り出し、そこに描かれた弾道ミサイル迎撃の略図を説明した。

そして、緊張した表情で今回の派遣の異質さを語る。

「このイージス艦“いぶき”の派遣には、政府及び防衛省上層部の、ある目論見が存在すると言われています。それは――”

レポーターはフリップをめくり、去年の軍事パレードで“北”が公開した移動式弾道ミサイル発射システムの写真を見せる。

「“北”の核武装が実戦投入段階に入ったことが、背景にあるのです”

彼女はフリップを下げ、背後で先陣を切るように外洋へ出ていくイージス艦の後ろ姿を眺めた。

「核ミサイル迎撃能力を持ったイージス艦をアフリカへ派遣し、万が一、反政府軍により弾道ミサイルが発射された場合は迎撃を行う。これにより、日本が核攻撃に対して有効な防衛手段を持っていることを世界へ向けてアピールできます。国際協力の陰に隠された、日本政府の目論見は、緊迫

する極東アジアの軍事情勢と無縁ではありません……」

レポーターの声が聞こえなくなった。

陸地が離れていく。

久世の心に、自分達は今から日本ではない場所へ向かうのだ、という実感が湧いてきた。そして、高揚感と、まだ見ぬ何かへの恐れがないまぜになった不思議な感覚を抱く。

久世は迷彩柄の作業帽の底を少し上げ、埠頭にいる見送りに来た家族や関係者達の中に、ある顔を探した。

ややあつて、今年で二十四歳になる久世の誠実そうな、悪く言えばお人好しそうな顔が、空模様と同じく曇る。

若い、彼の襟には幹部自衛官を示す、一本線と桜のマークが一つあった。三等陸尉、普通の軍隊で言うところの少尉である。

そんな青年将校である彼が探していたのは、数日前に彼に別れを切り出してきた恋人だった。

別れたとはいえ、せめて見送りには来てくれるのではないかと、期待したのだ。

しかし、元カレの見送りにやってくる方が、おかしいといえばおかしい。

結局、期待は現実にならなかった。

期待していたということは、未練があったということでもある。

失望した久世は空を見上げた。

小雨程度だったのが、ぼつり、ぼつりと大粒の雨に変わっていく。

「泣いてるんすか、久世小隊長？」

隣に立っている、若い———というか幼いと形容してもいい風貌の、新隊員の部下が尋ねた。迷彩服の胸ポケットの上には「市之瀬」と刺繍されている。

にしし、と意味深に笑う悪方キだが、久世とは上官と部下の関係であるにもかかわらず、なぜか気が合った。もしかしたら、思ったことを躊躇いなく言える彼の無遠慮さが、自分には逆にありがたいからかもしれないと、久世は考えている。

「泣いてないよ」

正直なところ、強がりだった。

「嘘だあ、泣いてますよ。彼女さんいなかったんでしょ？」

「元カノじゃバカ」

「なおのこと泣けるじゃないすか……」

ため息を一つつき、まあな、と苦笑してから、久世は真面目な指揮官の顔つきになって埠頭の人々を見た。

ハリウッド映画のように、恋人と抱き合い、キスをして「無事に帰ってくることを祈っているわ」と囁かれる。そんな贅沢は求めまい。

ただ、守りたいと思った人に傍にいて欲しいと望むのは、自衛官として贅沢ではないと思ったかった。

見送る人すらいらないなんて、こんな惨めな“軍人”があつてたまるかと文句の一つも言いたくなる。

彼女の言う通り、防衛大学校を卒業した時に自衛隊幹部の道を取^あえて選ばず、そこそこの会社のサラリーマンにでもなっていれば良かったのかもしれない。

彼女は、最後の最後まで待つてくれていたのだ。

『優しいあなたに自衛隊指揮官^{しきかん}なんて未来は似合わない』と。

それは暗に、二人の将来を考えて欲しいという願いだったのだ。

自分は、そんな彼女の願いに気づけなかった。

なんてザマだ、この僕は……

雨が降りしきる輸送艦の甲板^{かんぱん}で、久世は自分に愛想が尽きてしまった。

「……未練がましい男は元カノ以外にも嫌われるっすよ？」

「お前、今日から三ヶ月便所掃除^{そうじ}固定配置な」

「しょ、職権乱用はんたいい！」

「あ！ 市之瀬、見ろ！」

久世は埠頭^{ふ頭}にいる一人の少女を指さした。高校の制服を着た、ツインテールの女の子だった。

「ほら、あそこ。妹さんが心配そうに見送りに来てるぞ」

「あつ！ 美奈^{みな}!? ……ったく、大丈夫だって言ったのになあ」

人込みが米粒から次第にゴマ粒になり、そして、完全に水平線の彼方^{かなた}へと消えていく。

雨の中、去っていく艦隊を見送る者達にとっても、それは同じだった。

レポーターは、霧の中へと没していくように出港した艦隊を見送ると、締め言葉^{ことば}を口にした。

「艦隊がアフリカへ到着するのは約一ヶ月後の予定です。到着後は、他の参加国と共に陸上及び海上での実弾演習を展開するなど、反政府軍への牽制^{けんせい}を行います。陸上自衛隊はアメリカ軍の後方に基地を設営、医療・給水支援を主とした後方支援を行うとのこと」

自衛隊国連平和維持軍派遣艦隊は、こうして母国を離れた。

その先に何が待ち受けているか、誰にも予想できない旅立ちだった。



イーリス。

ギリシャ神話における全能の神ゼウスが、戦術に長ける女神アテナに授けたとされる、最強の盾^{たて}。

イーリス艦。

イーリス・システムと呼ばれる、高性能レーダーとコンピュータを搭載^{とうざい}することで、同時に二百以上の目標を捕捉・迎撃する「システム防空」が可能な世界最強の防空艦。

自衛隊の、そして日本の専守防衛という理念を最も象徴しているとされる戦闘艦である。

その海上自衛隊イーリス護衛艦「いぶき」艦内では、『配食始め』のアナウンスと同時に昼食が始まっていた。満載排水量約一万吨、全長百七十メートルに達する、世界的に見ても大型の艦な

ので、必然的に乗員の数も多い。

だから、食事ときの今、一般乗組員用の食堂である科員食堂は非常に賑わっている。

一方で、幹部隊員専用の食事が提供される士官室は、肅々とした雰囲気^{ふんいき}に包まれていた。艦の中で、ここだけは落ち着いた印象を受ける。

「司令臨場、気をつけっ！」

幹部の一人が声を上げ、長テーブルに座る幹部達が一斉に姿勢を正した。

そして、ずっと士官室に入ってきた一人の男が、上座^{かみざ}に腰をおろす。

男は、幹部達と同様に航海中の服装である黒の作業服を着ていた。

一見すると、若く見える。

しかしそれは、雰囲気によるものだった。実際は中年なのだが、身のこなしにキレがあるのだ。背筋は伸びており、そこらの若者よりも覇気^{はき}があった。身体こそ小柄だが、それが気にならない威厳^{げん}を備えている。いや、威厳^{いげん}というよりは、頼りがいがあると表現した方が正しいだろう。ただ、見た目はどこにでもいそうな、人のよさそうな男性だ。

彼が蕪木紀夫海将補^{むらぎのりおかいしょうほ}、この国連平和維持軍派遣艦隊の最高責任者であった。

「休ませ」

「休めえ！」

「ああ、後はいいさ。とっとと食べてしまおうか。皆食べてくれ。お、今日は金曜カレーかね？」
真面目^{まじめ}だったのは最初だけで、蕪木は号令をかけた幹部を止めた。

大して意味のない、形式化した決まり事を長く続ける必要はないと、彼は考えていたのである。彼らしい、と笑みを浮かべる幹部もいれば、締まりのない司令だ、と憚然^{たげん}とする者もいた。

「相変わらずですね、蕪木司令」

涼やかな声が士官室に響いた。

向かいの席に座る、艦隊の指揮幕僚団^{しきばくりょうだん}の主席幕僚^{ぼくりょう}、加藤修二^{かとうしゅうじ}等海佐^{かいさ}のものだった。
ここに居並ぶ幹部隊員の中で、やけに異彩を放つ人物だった。

彼がかけているノンフレームの楕円形^{だえんけい}の眼鏡^{めがね}は、角度のせいなのか、しょっちゅう光を反射させているため、遠くの甲板^{かんぱん}にいても認識^{だんし}できることで有名だった。高校生といっても通用するのではないかと思われる童顔^{どうがん}で、むさくしい風貌^{ふうぼう}ばかりの周囲からは浮いていた。時代が時代なら「参謀^{さんぼう}」と呼称される主席幕僚^{ぼくりょう}の役職にいる人物には到底^{とうてい}見えない。

蕪木司令の右腕、それが彼だった。昼食で席がすぐ近くなのはそのためだ。

「指揮官^{しきかん}の私がいんだからいいんだ」

にやりと笑う蕪木の顔は、まるで少年のように生氣に満ちている。

彼は、様々な思いの込められた周囲の視線は敢えて気にせず、カレーを口に運ぶ。

しばらくすると、みんな艦内での数少ない楽しみである昼食に意識が向いたためか、蕪木のことを気にする者もいなくなり、和やかな食事風景となった。

一人、主席幕僚^{ぼくりょう}の加藤だけが報告がてらに話をする。

「気象班からの報告によると、昨日発生した台風は航路から逸れるそうですよ」

「ほう、なら安心だ。他には？」

「いえ、別にないですねえ。ああ、昨日僕が変な夢を見たくらいですよ」

「夢……？」

できるだけ平静を装い、蕪木は加藤へ顔を向ける。

「ええ。よく覚えてはいないんですが……背中に羽の生えた女の子が、血を流して……」

士官室にいる全員が、ぎょつとして彼に目を向ける。

さすがの加藤も、苦笑してごまかした。

「あははっ。すいません、食事中にする話じゃなかったですね」

だが、蕪木はそのまま流すことはしなかった。

「不思議だな」

「え？」

「私も見たんだよ。翼の少女が生け贄にされてしまう夢……」

「ええ！ ほ、本当ですか？」

心底驚いたように、加藤が好奇心の強そうな目を丸くした。

生け贄……ああ、確かにそんな感じだったような、と唸っている。

夢、翼の少女、生け贄、そして同じ夢を見た部下、か。

「司令、お疲れなのではないですか？」

異様な話をしている上官に、医務官の一人が口を挟んだ。

「そうですね、何せ今まで苦しい日程でしたから……」

“いぶき”の航海長も加わる。

彼らが言わんとしているのは、この艦隊の出勤経緯についてであった。

どうして艦隊が編制され、何を任務とするのか――

それは、今から半年前のことだった。

紛争が起きているアフリカのある国で、国連施設が立て続けにテロに見舞われたのが発端だった。

ただこれ自体は、アフリカではよくある光景である。

だが、今回は他と大きく異なる場所があった。それは、テロを実行した反政府軍が、密輸入したスカッドミサイルを始めとする弾道ミサイルを使用し、都市への無差別攻撃を行ったことだ。

核と長距離ミサイル技術の拡散を防ぐ意味でも、国連は米英を中心とした平和維持軍の派兵を決定した。しかし、決めたはいいものの、多数の犠牲者を出した九三年のソマリア派兵のような失敗を、各国政府が恐れたため、頭数がそろわない。そこで、米国が日本へ支援要請をするに至ったわけである。

日本政府は、反政府軍の弾道ミサイルの迎撃に成功すれば、“北”の核やミサイルといった瀬戸際外交のカードを無力化できると考えた。それは、拉致被害者救出にも大きく役立つだろう。

利害が一致した以上、自衛隊派遣へ踏み切るのにそう時間はかからなかった。一部の党から猛反発があったものの、与党は世論を味方につけて押し切った。

政府は加えて、弾道ミサイル迎撃の世界アピールのために最新鋭イージス艦“いぶき”を艦隊へ組み込んだ。更には「ブーツ・オン・ザ・グラウンド」——陸自を投入することで国際社会での地位固めを図ったのである。

『国連参加国としての人道支援』という言葉こそ聞こえはいいが、結局は政治家の思惑やら、防衛省で豪華なイスにふんぞりかえっている連中の点数稼ぎのための派遣なのだ。

彼らは、もし自衛隊が何か失敗したとなれば、現場に責任を被せて、命令したはずの自分は反対していたとでも言うつもりだろう。

畜生め、と現場一筋の蕪木は思っている。

救いなのか重荷なのかはわからないが、最悪の事態が起こる可能性もあるため、武器・弾薬は今までの海外派遣では例にないほど充実していた。

軽空母並みの巨体を誇る二隻の輸送艦には、陸上自衛隊の車輛、各種機材、戦車、戦闘ヘリ、そして弾薬が満載されている。

海上自衛隊は、この最新鋭イージス護衛艦“いぶき”の他に、一万九千五百トン級のヘリ搭載艦や、支援艦として大型補給艦まで引っぱり出してきていた。

これは、戦場に行く布陣と言ってほぼ間違いない。

政治家の中には『世界に誇れる日本艦隊』などと喜んでいる者もいるが、そんなのんきな気分で艦隊を編制したわけではないのだ。

だが蕪木は、任務そのものについてはそれほど悲観していなかった。

彼は現場が好きだった。できることなら定年まで艦に乗っていたい。

現場で先頭に立つ者がいないなら、自分が立てばいい。それが蕪木の信念だった。そんな性格が災いして、エリートでありながらこれ以上の出世は絶望視されているのだが。

「蕪木司令や僕が普通に見えたら、むしろ危険信号だよ。医療班は注意してね」

「よしなさい」

加藤二佐が航海長たちに茶化すような返答をするのを、蕪木はたしなめた。

……こいつも変わり者だな。まあ、史上最年少の砲雷長だったが、演習で仮想標的だった自艦から反撃して対抗部隊を全滅させるような問題児だから当然か。それに、彼を原隊から主席幕僚に引き抜いたのは他ならぬ自分なのだから、文句は言えないな。

蕪木は心の中でそう苦笑しながら、どれだけ食べても嫌いにならない伝統の海軍カレーを口に運んだ。

艦に乗って三十年、食べ慣れた味が心を落ち着かせてくれる。

こうしてゆっくり食事をしている今が、とても大切に感じられた。派遣先で戦争になれば、こんな日常は営めないから。

そんなことを思いながら、蕪木は先刻の加藤の話を反芻してもいた。

……背中に翼を持った少女。

彼女は、何かを求めているような気がした。

……そう、とても切実に。

いつの間にかカレーを食べることさえ忘れ、蕪木は思考に囚われた。同じ夢を見た者がいるからといって、何かが起こるわけではない。それなのに、なぜか胸騒ぎがするのである。船乗りの勘だろうか。

『そう……あなたたちなのですね……』

「え？」

少女の声が聞こえた。

一瞬、空耳ではないかと混乱した。

だがすぐに、彼ははっとして顔を上げる。

加藤が、カレーの載ったスプーンを宙に浮かせたまま、ぽかんと口を開けて、ある一点を凝視していた。

蕪木も彼の視線の先を見る。すると、そこには薄衣を纏った少女が立っていた。

「なっ!？」

彼女がいるのは、長テーブルの上、向かい合う幹部達のだ真ん中である。

自分は夢を見ているのか!？」

背中に冷たい汗が伝う。

その場が騒然とした。ガタガタと、居合わせた隊員たちが椅子から立ち上がる。

「お、おい!？ 誰だお前はっ!？ どうやってこの艦に侵入した!？」

「司令、お下がってください!」

部下の一人に制されるが、蕪木はその少女の顔をじっと見つめたまま動かなかった。

「き、君は……!」

彼はつい昨日、彼女を見た。

夢の中で。

腰まである長い銀髪の間から、薄く白い衣が覗き、身体中に幾何学模様の黒い刺青が走っている。

そして、その背中には、大きな白い翼。

すう、と彼女が目を開けた。

『あなたたちに託すしかないのです』

蕪木がその言葉の意味を理解できずにいると、加藤が彼女に問いかけた。

「託す? いったい何をだい?」

この状況で唯一、冷静であるように見える加藤を、少女の優しい瞳が捉えた。

そして、加藤の真剣な眼差しを前に、寂しげに呟いた。

『ごめんなさい……』

「お、おいっ!？」

再び瞑目した少女に何かを感じた蕪木が、咄嗟に声を上げる。

その瞬間、土官室が薄暗くなった。しかし、照明が落ちたわけではない。

いったい何だ!？」

その場の全員が、背中に嫌な汗をかいた。

少女は小さな声で不思議な旋律の歌を口ずさみ始めた。すると、彼女の足下が緑色に淡く光り出す。そこでは、何か模様みたいなものが蠢（うごめ）いているように見える。

蕪木の隣で加藤が、その光を見つめる。

「魔法陣……？」

それは、加藤が趣味で読んでいるオカルト雑誌で目にしたことがあるものによく似ていた。

「何をしてるんだ！ やめろ！」

若い幹部の一人が、少女を止めようとテーブルに上がった。丸腰の少女一人なら、止めることができると思うたのだろう。

「ダメだよせ!!」

嫌な予感がした蕪木が叫んだ、その時だった。

ゆらり、と士官室の空間が歪んだ。

今まで体験したことのない感覚に、全員が目の錯覚か、毒ガスによるテロだと思った。

続いて、まるでタールのような闇が、彼女の全身に刻まれた紋様から溢れ出た。それは、白いテールクロスを浸食して、あつという間に士官室全体を蝕んでいく。

「ひ！」

闇は、近くにいた船務長にまで伸びていくと、そのまま彼を包み込んだ。

「うわあああ!」

「た、退避……や、やめろおー!」

まるで意思を持っているかのように動く、そのぬめった闇が、逃げ惑う幹部達を呑み込んでいった。まさに阿鼻叫喚の光景だった。

闇に喰われる！

人間の奥底にある本能が恐怖した。

「ひよああああ!? お助けえー!」

逃げ遅れた加藤も、悲鳴と共に闇に消える。

士官室で最後まで残った蕪木は、闇から距離を取り、司令として冷静に抵抗を試みていた。自分に課せられた使命、部下を守るという責務を果たさなければならぬ。

彼は入口そばの壁にある艦内電話を握った。

「こ、こちら士官室、蕪木……総員……救命ボートを……」

総員退避を命令しようとするが、そこへ闇が覆い被さってきた。

艦の中では広い部類に入るこの士官室だが、一般の部屋としては狭いものだ。闇が追いつくのもすぐだったのだ。

「繰り返し……総員……くう……」

闇は士官室だけでは飽きたらず、窓や出口を通って外へとその手を伸ばしていく。艦全体を、いや、艦隊そのものを呑み込もうとしていた。

視界全てが闇に包まれた時、蕪木は最後の手段として、この“いぶき”への撃沈命令を出そうと

した。だが、遠のいていく意識の中、艦内電話を握る手からも力が奪われていき、やがて絶望の淵へと追いやられた――



「う……」

仰向けに倒れたまま、久世は目を覚ました。

彼は最初、自分が俯せに倒れていると勘違いした。というのも、視界が何かによって遮られていたからだ。その“何か”を甲板と思っていたのである。しかし、そうではなかった。冷たい甲板の感触が背中に感じられる。今自分は、仰向けに倒れ、空を眺めているらしい。視界を遮っているのは周囲を包む霧だった。

「はっ!？」

あ、あの気味の悪い黒いウネウネは!？」

彼は上体を起こし、周囲を見回す。

イージス護衛艦“いぶき”から溢れ出した、あの謎の闇のことを思い出していた。

自分は確か、あれに吞まれる前、甲板上に固定してある車輛の固縛外れや、潮風による車輛の傷みがないかといった、点検作業を行っていたはずだ。車輛の管理責任者である自分の仕事なのだが、おかげで堂々と外に出ることができるので、半分は息抜きとしてやっていた。そこまでは覚えている。

まだ夢の続きを見ているのだろうか。霧がかかっている周囲の光景は、そう思わせてしまうほどの幻想的なものだった。

おまけに、誰もいない。

彼のいる艦尾近くからは、艦が進んでいることを示す白い航跡が見えた。大きな機関音も聞こえてくる。今この輸送艦は、幽霊船ではなく生きた船として動いているのだ。

彼はなぜか、そのことにとても安心した。

「に、してもさっきのは一体……」

まさか自分一人だけが見た幻覚だろうか。

とにかく、艦内に戻って部下の安否を確認しなければならぬ。目を覚ましたら立ちこめていたこの濃い霧といい、あの黒いうねうねといい、尋常ではない。

なんとか、立ち上がる。

痛むところはない。少し頭にもやがかかったような感覚が残ってはいたものの、意識は完全に覚醒している。すぐに良くなるだろう。

久世が、急いで艦内へ続くハッチに向かおうとしたときだった。

ラ……ラ……

旋律が霧を伝って彼の耳に届いた。

まるで引き留められたように、彼は足を止め、声の方を向いた。

岩礁だろうか、乗っている輸送艦の右舷二百メートルほど先に何かが見える。声はそこから流れ

てきているようだった。

「なんだ？ 歌？」

誰が歌っているのだろう、ここは太平洋のど真ん中のはずだ。

彼は広大な甲板を見渡すために用意していた双眼鏡を手にする。

レンズ越しの世界が彼の眼に映し出された。

ララ……ラララ……

輸送艦が進むにつれ、霧中へと消えようとしている岩礁に、彼ははつきりと見た。

「う……そだろ……!？」

そこには数人の人影があった。

最初はアシカなどの海棲動物が横たわっているのかと思ったが、そうではなかった――

久世は凍り付いたようにその光景を凝視し、霧の中へ没していく岩礁を見送る。

「久世三尉！ こんなところにいたの！」

突然、背後で女性の声がした。

振り向くと、そこに立っていたのは若い女だった。

年齢的には二十代後半、久世と同様に陸自の迷彩服姿だ。

「板井中隊長!？」

彼女の姿を見るなり、彼はその名を叫んでいた。

板井香織一等陸尉。

彼の所属する中隊の中隊長である。

彼女はいわゆる女性自衛官^Aというやつで、久世が防衛大学にいた頃の先輩に当たる人物でもある。

……大学では鬼先輩として彼をシゴき倒し、任官後はDS上司としてイビリ倒している恐怖の存在だった。

それでも、やっと生きた人間、それも自分と関係のある人物と出会えた。

姿を認めるなり、久世は弾かれるように彼女のもとへ駆け寄った。

途中、あまりに気が動転していたため、足がもつれて転びそうになった。

「ほ、報告しますっ！」

「ど、どうした……の？」

久世のかつてない形相に、彼女もたじろいでいた。

肩までのセミロングの髪が潮風に揺れている。黙っている分には、美人と形容して差し支えない容姿である。

「い、い、い、今、本艦右舷に、『人魚』の群れが！」

必死にその方向を指さす。

板井が指の向かう先を何事かと確認するが、そこには濃い霧がかかっているだけで、もう何も見えなかった。

彼もそのことに気づいて呆然とする。

すると、上官はそっと彼の肩に手をかけ、心配そうな表情を浮かべた。

「……落ち着いて久世三尉。どこか痛むところはある？」
「へ？」

「君は気を失ったショックで混乱しているの。大丈夫、医務室に行きましょ。自分で歩ける？」

「う、嘘じゃありません！」

「うん、そうね。詳しくは医務室へ行ってから聞こう」

普段なら絶対に見せないこの優しさが少しだけ嬉しかったが、じれったくて仕方がない。

「ちょっと待ってください！ ホントなんですよお！」

「ええ、分かっているわ。さあ、艦内へ戻りましょ」

彼女には格闘訓練でいまだに勝てたことがない。がつしりと腕を掴まれ、連行されるように引きずられていく。徐々に久世の叫ぶ声が小さくなっていった。

やがて甲板から二人の姿が消え、再び静寂が海原を支配した。

スクリュウの巻き起こす白い航跡が、はつきりと海面に浮かび上がっている。

ややあつて、その航跡の横で、ちゃぷん、と微かな音がした。

それが、数人の少女が海中から顔を出した音であることに気づく者はいない。

彼女らの先には、あてもなく進んでいる輸送艦の艦尾がある。

少女たちは三人とも、人形のように整った顔で小首を傾げると、心配そうな表情で再び海中へと潜っていった。

彼女らの“尾鰭”が立てた泡が、スクリュウの起こした航跡の中で躍っていた。

第2章 アルゲンタビス

風を切って飛ぶのが、彼女は好きだった。

ゴーグルの向こうには、吸い込まれそうなほどに蒼い海原が広がっている。

マリースアの夏の潮風を感じる。世界がどんな惨状になっても、とりあえず夏はちゃんとやってきてくれるらしい。

彼女——ラロナは、まるで熱い血潮のように紅い髪をかき上げた。

女だというのに肩にもかからない長さなのか、とよく髪のことを莫迦にされるが、彼女はこの髪型を気に入っていた。それに、あまり長いと、強風に叩かれることが多い飛行時には邪魔になる。

そんな女つきの欠片もない無造作なショートカットでも、彼女には独特の野性的な魅力があった。ただ、勝ち気そうな顔つきと合わさり、遠目だと少年に見えなくもない。

眼下に広がる海原と同じ蒼い瞳には、一点の曇りもない。

彼女は身に着けている物を確認する。飛行中何度も確認しているが、どうしても気になってしまふ。もはや癖だった。

空を飛ぶ人間はひょんなことで物を落とすので、確認作業が癖になるのは当然かもしれない。

まず、着けているのを忘れるくらい軽い短胸当て。役割としてはほとんど儀礼的な、部隊識別である。胸当ての中央には、鳥のシルエットに槍と短剣が交差した「飛行軽甲戦士団」であることを示す紋章が輝いている。

オリブ色の穿き古された短パンに、腰には白兵戦用の短剣。長時間の飛行で足が傷つかないように濃紺のニーソックスを履いているが、どれもそろそろ買い換えどきだった。

「はっ！」

彼女は気合いを入れて手綱を操った。まだ十五歳になったばかりにもかかわらず、その動作は手慣れたものだ。

今、晴れ渡った空を飛んでいる。

乗っているのは、「鳥」だった。

鳥といっても、当然普通の鳥ではない。翼長だけなら竜、並みの巨大種である。

アルゲンタビス。

人を乗せ、人と飛ぶ、大なる鳥。

外見はハヤブサに似ており、その偉容にふさわしい知性も、ある程度備えている。

世界的に軍・商用に飼い慣らされている種であり、一般には「巨鳥」と呼ばれて親しまれていた。ラロナが小柄とはいえ、人ひとりの他に旅道具一式を乗せて長時間飛行してられるその馬力——ならぬ鳥力は、かなりのものだ。

竜と比べれば安価に手に入れられることなどから、一般的には伝令や偵察といった比較的細かい

任務を担う場合が多い。だが、数が揃えられる名産地では、軍に専門の部隊が編制されることもあった。

ラロナの属する部隊がまさにそうである。

マリースア南海連合王国軍・飛行軽甲戦士団が正式名称だ。

周辺に点在する島々と、デメテル大陸の一部を領土とする連合国家が、彼女の母国である。彼女は大陸内陸部の山育ちだったが、この美しい海原がとても好きだった。そのため、哨戒任務という地味な仕事もそれほど苦にはならない。

「テール！ 気持ちいいなあー！」

巨鳥の背中に装着された専用の鞍に跨り、彼女は軍に入隊してからずっと組んでいる「相棒」に語りかけた。

キュエ、と甲高い声で、テールと呼ばれた巨鳥は応じる。

「うんうん。そうだろー」

ラロナがカッカと笑う。

鳴き声や表情から、巨鳥の言っていることがある程度、彼女には分かるのだ。その人外じみた能力のおかげで、彼女は飛行軽甲戦士団の鳥騎手に選抜された経緯がある。

マリースアは海洋国家だが、デメテル大陸にある国境線付近には山脈が広がっている。その山岳民である彼女は、鳥と共に育った。険しい山岳地帯では、巨鳥は昔から重要な輸送・連絡手段なのだ。しかも彼女は、十年前の国境紛争で家族を亡くして以来、鳥達が家族のようなものだった。

彼女からすれば、家族と話せるのは当然のことという感覚だ。

その能力を活かして、彼女は部隊に配属されてくる新人と、それに乗る鳥との相性を見てやりもしている。周囲は彼女の能力を半信半疑で見ているが、本人は至って真面目だった。

——と、彼女の表情が不意に険しくなった。

潮の香りが変わったのを察知したのだ。

いや、潮の香りというより、場の雰囲気（ふんいき）が変化したといったほうが正確だろう。

重く、まとわりつくような空気。

水平線を確認すると、霧のかかった海域が近づいてきていた。

「……もう少しで『人魚の海』か」

だいぶ飛んできたな、と彼女は呟（つぶや）いた。

そこには、決して霧の晴れることがない魔の海域が広がっていた。

『大継承戦争』の頃に、戦火を逃れてきた最後の海棲人（マフオールク）たちが棲み着いた場所である。

なぜこの海域に棲み着いたのか、はつきりとしたことは分かっていないらしい。研究も進んでいない。王立教養学院の研究者の間では『閉鎖環境を作ること種族を守っている』という説が有力だ。なにせ、霧の中へ迷い込んだが最後、生きて帰ってくる者はほとんどいないという海域である。

研究が進まないのも仕方がなかった。あの海域の奥深くには、世界の切れ目があるのだ、という奇想天外な説まで流布（ふ）しているらしい。

だが彼女にとって、海域の真実なんかどうかでもよかった。

大継承戦争といえば神話の域、一千年以上前の話なのだ。そんな時代から存在し続ける、詳細不明の場所など、自分にはどうしようもないとしか言いようがない。

それよりも重要なのは今の任務だ。

現在の彼女の任務は、領海の哨戒（しやうかい）だった。

早朝に王都を出て、ほぼ一直線に飛んできた。正午に差しかかるうという今の時刻で、人魚の海に到達するのはかなり早い。夏風が強く吹き、テールがそれに乗れたからだろう。天気は左右される巨鳥の速度と行動範囲だが、今日は運が良かったようだ。

この海域は、人魚の海の影響があつて船や商用巨鳥の往来は少ない。辺境と言って差し支え（つか）ないところだ。

だが、海を挟んだ向こう側のルールイエ大陸に比較的近いため、敵の侵攻ルートになりうる、軍事的には重要な地域だった。

敵——つい二ヶ月前に、ルールイエ最後の防波堤（ぼうはてい）と言われた神聖プロミニア帝国を滅ぼした国である。ルールイエ大陸を僅（わずか）か五年でその手中に収め、このデメテル大陸に迫らんとしている。

それが、フィルボルグ継承帝国。

ご丁寧（ていねい）なことに、自らが世界の継承者であることを強調するため、国名に継承の名を刻んでいる。ラロナはじつと対岸を監視した。

そこは継承帝国の手に落ちた、かつてのプロミニア領である。

無論、この方向から敵船団が現れるとは限らない。

それに、継承帝国はプロミニアとの戦争で、ある程度損害を受けている。立て直すには時間がかかるだろう。また、海を越えて軍勢を上陸させるには相当な準備が必要なはず。だから、今の段階でそこまで張り詰める必要もないだろうというのが、戦士団の考えだった。

しかし、ラロナは普段はずばりな性格だが、任務については生真面目だった。今も気を抜かずに水平線を観察している。

彼女は目がいい。巨鳥乗りに必須の身体条件だが、仲間の中でも飛び抜けていた。

「ん……？」

警戒していなかった人魚の海から気配を感じる。

彼女の動物的な勘はよくも悪くも当たることが多く、本人もそれを信じていた。

ラロナは身体を緊張させ、感覚を研ぎ澄ます。

その瞬間だった。

ボォー、と正体不明のけたたましい音が辺りに響き渡る。

あまりの大音量に、彼女は手綱を取り落としそうになったが、すんでのところで堪えた。

そして、彼女は霧の中から現れたその「存在」に気づいた。

「な、何なんだ……!? これ!？」

ラロナは眼下の「物体」に対して、形容すべき言葉が見つからなかった。

灰色の何か。

彼女に分かるのはそれだけだった。

「もしかして……帝国の船？」

海の上に存在し、そして一定の方向へ進んでいるのだから、それはいわゆる船に違いない。だが、船ならば備えているはずの、帆やそれに類するものは一切見つけれなかった。にもかかわらず、その物体は白い航跡を引きながら、海の上を風のように速く進んでいる。それだけではない。この物体はあまりにも大きいのだ。マリースアの港を利用する巨大な交易輸送船でさえ、この船の半分もないはずだ。

いくら大国である継承帝国でも、このような巨大な船を、それも帆も張らずに動くことができるものを持ったという情報は、聞いたことがなかった。継承帝国の海軍といえば、悪名高き海賊集団を母体としたものだが、海賊がこんな船を乗り回すとは思えない。

「し、しかもあっちって!？」

そう、入った者は出られず、また出てくる者もないはずの、人魚の海。

そこからやってきた異形の存在。

ラロナは総毛立った。

「と、とにかく、情報を収集しなきゃ」

彼女は必死になって冷静になろうと努める。

自分の任務は哨戒だ。異状があれば、それを可能な限り調べることが最優先である。

「数は五隻、色は灰色、全体的に角張っていて、人の姿は見当たらない」

彼女は目を凝らしてその物体の全容を把握しようとした。

船ならば、甲板ではマストの帆を操作する水夫などがいつも忙しなく働いているものだが、そういった連中は見当たらない。何から何まで不可思議な船だった。

「テール！ もう少し接近してみよう！」

彼女は相棒と共に旋回すると、高度を下げてその物体に接近を試みた。



「リーダーに感あり！ 目標方位二百七十度！ 距離二マイルを切ります！ 本艦に接近しつつあり！」

イージス護衛艦「いぶき」の戦闘情報センター内で、電測員が叫び声を上げていた。

「なぜここまで探知できなかった？ ……そうか、島影に隠れていたのか」

船務長——艦のリーダーや通信を担当する責任者——が呟く。

戦闘情報センターは、別名「CIC」とも呼ばれる部署で、戦闘艦の頭脳と言える場所である。

艦の奥深くにあり、窓はなく常に薄暗い。広さは学校の教室ほどだ。リーダーやソナーなどの各種探知装置から兵器の火器管制まで、あらゆる情報が集まり、ここで一括管理、指令が行われる。

壁に配置されている巨大なレーダスクリーンは目標がたった一つ。それを見つめながら、船務長が叫んだ。

「国籍は？ SIF照合急げ！ どの航空機だ？ グラム発の民間旅客機辺りか？」



艦隊は、あの異変があった後、進路を変更して最寄りのグアム島米軍基地を目指していた。なぜなら、日本との通信だけでなく、あらゆる交信手段が沈黙状態という、緊急事態にあるからだ。

ゆえに、航空機が飛んでくるとしたらグアム国際空港から、と船務長は考えた。だがあくまで、それは常識としての予想である。

「当該機ATCトランスポンダ、レスポンスなし！ 国籍不明機です」
電測員が首を横に振る。

SIFとは、航空機に搭載されている識別装置のことである。軍用機だけでなく、ジャンボ旅客機クラスなら必ず搭載している装置で、機体のパーソナルデータを周囲に知らせる機能がある。その反応がないということは、相手はSIF送受信機を持たない古い小型の民間機なのだろう。

「無線で呼びかけるんだ。国際周波数を使用。出るまで続けろ」

電波そのものが消失状態にある中、たった一機でも航空機が現れたのは幸いだった。

だがその時、艦橋から連絡がサンドパワー伝いにやってきた。

自衛隊の艦艇で使用されている艦内通信機であるサンドパワーは、無電池電話とも呼ばれる。声の振動を電気信号に変え、艦内程度の距離であれば電源なしで使用できる通信機である。いわば高度な糸電話である。

『CIC！ 目標とコンタクトは取れたか!?』

船務長は、艦橋からの航海長の通信がやけに慌てていることに違和感を抱く。

おそらく、この距離ならもう艦橋の方では目視できているはずなのだ。

「こちらCIC、当該航空機には国際周波数にて呼びかけておりますが、向こうの通信機の不調か返信は……」

『航空機だと!? バカこけ!』

艦橋からの通信は、ほとんど悲鳴に近かった。

『あれは“鳥”だ!』

「鳥……? イーリス艦のレーダーがこの距離で鳥の群れを識別できないわけが……」

イーリス護衛艦の三次元レーダーは、同時に二百以上の目標を捕捉・追尾が可能なほど高性能である。たかだか数キロ単位の距離で、ここまで強い反応を示す物体を誤認するとは考え難かった。

だが、艦橋は怒鳴り返してきた。

『違うっ！ 鳥の群れじゃない！ 翼長十五メートルはある巨大な鳥の怪物だ!』

「よ、翼長十五メートルの鳥!？」

艦橋からの通信に、船務長は愕然とし、思わずレーダースクリーンを見た。艦橋にいる連中は、あの霧の海の中で幻覚作用のあるガスでも吸ってしまったのでは、と一瞬疑う。

「せ、船務長……あ、あ、あれ」

だが、CICのモニターにようやく映し出された艦外カメラの映像に、その場の全員が絶句した。そこには、巨大な鳥と、それに跨る赤い髪をした一人の少女の姿があった。

鎧のようなものを身に着け、腰に剣を提げたその少女。

隊員達には、まるで古代ローマの兵士か何かのように見えた。時代錯誤もいいところの身なりで

ある。

モニター越しに、彼女はこちらを睨むようにしている。
ヘッドセットを装着し、最新鋭設備に囲まれたCICの隊員達は、呆然としたまま彼女の視線を受け止めるしかなかった。



「正体不明生物、再度接近ーっ！」

艦橋の側面にある、ウイングと呼ばれる艦外監視場所に詰める隊員が、双眼鏡で目標を追尾しつつ、周囲に向かって叫んだ。

直後、リーダーマストの真上をかすめるように巨大な影が通りすぎた。

「うおっ!？」

バサバサと翼を羽ばたかせる音が重く響き、隊員達はその迫力に身を竦めた。

主席幕僚の加藤は、ハッチを開けて艦橋内からウイングへ飛び出すと、正体不明の巨大な鳥を追った。

「あんな生物が実在するなんて……!」

「グアムにあんな生き物がいたなんて聞いたことありません!」

航海科の海士が、信じられないといった顔で叫んでいた。

「ちょっと貸してくれる?」

加藤は、ウイングの監視員にどいてもらい、据え付けられた長距離望遠鏡で鳥を観察した。

(乗っているのは……少年? いや、少女か!?)

光学レンズ越しに映し出された赤い髪の少女は、無線機の類は持っていないようだ。そして、海洋文化を思わせる民族衣装のようなものを着込み、腰には剣を提げている。

鳥の背に跨り、手綱を手に行っているの、彼女がああ鳥を使役しているのが分かる。加えて加藤には、彼女の行動が、どこか強行偵察を試みているように思えた。ただの好奇心からの行動とは異なり、絶えず旋回を繰り返すなど、こちらの攻撃に備えて一種の回避行動を取っている気がしたのだ。(自分達は、何か今とんでもないことに巻き込まれているのでは……)

加藤は、交信手段を持たないことが歯がゆかった。



「少ないけど人がいる?」

謎の船の真上を通りすぎた際、ラロナは自分を見上げている人々の姿を確かに目にしていた。ただ、ずんぐりとしたチョッキのようなものを身に着けたその様子から、彼らの正体を探ることはできなかった。

「一体どこの国の人間だ?」

最初は継承帝国の人間ではないかと疑ったが、やはりどうもそうではないようだ。見知らぬ服装もそうだが、こちらに対して弓矢を射るなどの敵対行動が今のところ見られないからだ。

「分かんない……奴ら何者なんだろう？」

ラロナは、船の周囲を飛びながら考えたが、答えは出ない。

でも、そうした判断をするのは上官の仕事だろう。彼女はそう思い、軍の基本に立ち返り、ここは正確な情報を、一刻も早く持ち帰ることの方が大事だと判断した。

手綱を引き、相棒を旋回させる。

「何だろう、凄く胸騒ぎがするよ、テール……」

自分の感情であるにもかかわらず、ラロナはその不安の正体が分からなかった。

それは、あの異形の船に対しての不安というより、あの異形の船が現れたことで、何かが起こるうとしている、そんな得体の知れない漠然とした不安感だった。

「急ごう、テール！ 王都が心配だ！」

彼女の声に相棒は甲高く鳴き、帰路についた。



クー……

鳥の鳴き声が徐々に遠ざかっていった。

「行ってしまった……」

加藤が呟いた。

そして、水平線の彼方へ鳥が消えると、ウイングから艦橋の中へと戻った。

彼は押し黙り、険しい表情を浮かべている。

それは、艦橋にいる者全員に共通していた。

幹部隊員たちも困惑し、信じられないことが起きたと言っただけだった。

しかし加藤は、彼らと違い、必死に今の状況について何らかの結論を出そうとしている。

主席幕僚の義務感もあるだろうが、これは彼自身の柔軟さや適応能力の高さでもあった。

硬直した思考を持ってしまうがちな自衛隊幹部の中では、例外的な存在なのかもしれない。

ざわざわと落ち着かない雰囲気は艦橋を包んでも、加藤はほとんど動揺を見せずにいた。

「何か、分かったか？」

他の海自隊員と同じく、灰色の救命胴衣と鉄帽を身に着けた蕪木が、いつの間にか司令席からおりて隣に立っていた。

蕪木は、異質な存在になりがちな加藤を理解する数少ない人物である。そんな彼に対して、加藤も信頼を寄せていた。

ええ、と明るく蕪木に返事をする。

彼の声で、示し合わせたように艦橋が一斉に静まった。

注目を集めても平然とした様子で、加藤は一つ咳払いをする。

「我々が、士官室に現れた少女によつて起きたであろう異変のために現在位置を見失い、濃霧の中を迷走して約二十二時間が経過しました。その間、あらゆる周波数帯が沈黙。通信手段を失ったまま、緊急措置として最寄りと考えられたグアム島の米軍基地を目指す進路を取っていました」

加藤は自分の認識に異を唱える者がいないことを確認して、一呼吸を置く。

「しかし、霧を抜けたと思ったら、あの鳥です。乗っていた少女の国籍も不明……ただ、これらはさほど重要ではありません。これらは今後の問題であり、根本的な問題ではないからです」

彼は先刻のことについて深く言及はしなかった。

代わりに、現在の通信・レーダーの状況を「いぶき」の通信士に詳しく尋ねる。

「霧が晴れた今も、何の電波も傍受できないんですね？」

「はい」

「故障ではない？」

「三回も点検しましたが、機器そのものに故障はありません」

「衛星位置観測システムも、人工衛星からのレスポンスが消失して使用不能……ですね？」

通信士は無言の肯定をした。

加藤は断言した。

「そんなこと、地球上ではありえない」

それは、この場の人間が最も強く感じていた疑問だった。

電波妨害をされているわけでもないのに、民間のラジオ電波や衛星通信までもがダウンすること

など絶対にありえない。

ありえないことが起きている。想像もしない事態なので、原因が全く分からなかった。

自然なもの以外の電波の消失。

それはまるで、世界そのものが消失したかのような現象だった。

何人かが加藤の言っていることの意味を測りかねて、ぼそぼそと周囲と相談を始める。

だが加藤は気にせず続けた。

「量子力学の“多次元解釈”というものをご存じですか？」

「いや……なんだねそれは？」

蕪木が聞き慣れない言葉に少し驚いた様子で答えた。

加藤は腕を組み、片手の人差し指を立て、教師のような口調で説明を始めた。

「量子力学は“シュレディンガーの猫”という思考実験で有名な分野なのですが、極論してしまうと世界は一つだけではない、という仮説があるんです」

「世界？」

「そう、世界です。我々が住む世界には多数の平行世界が存在し、平行しているがゆえに交わらず、我々には知覚できないし、存在を知る術もありません」

加藤の淡々とした話し声は、聞かざるにすんなりと入ってくる上に、不思議な説得力があった。「ですが、なんらかの方法で、別の世界にあるものを自分達の世界へ持つてくる事ができたなら？」

加藤はそこまで言って、眼鏡の位置を中指で直した。

「あの、翼を背中に持った少女という『観測者』は、自らを『結節点』とすることで世界を交わらせ、我々を別世界へ引きずり込んだのでは……？　しかし、一体なぜ我々である必要が……？」

「加藤二佐、いったいなんの話をしているのか私にはさっぱり分からんよ」

幹部の一人がヤジを飛ばすように遮った。しかし、加藤はそれを意に介さず話を進める。ただ、少し早く、結論を告げることにした。

「つまり、僕の仮説が正しいなら……世界が消失したのではない」

そして、居並ぶ幹部たちを見回し、彼は言い放った。

「その逆、つまり今、我が艦隊の方が『平行世界』に迷い込んだのです！」



マリースア南海連合王国の王都『セイロード』。この街は海洋交易都市であり、また城下町として活気にも満ちていた。

夕刻になってしばらく経ち、そろそろ教会の鐘の音が聞こえてくるはずだった。全てが朱に染められた逢魔が時に、悪霊を追い払う光神の音色である。

都の湾岸線は大きく三日月を描いており、その両側は岬となっていた。二つの岬には高低差があり、低い岬が灯台で、高い方が王城だった。

王城は古くから改築を繰り返している。記録に残っているだけで六回目の拡張整備によって、ようやく今の姿に落ち着いた。人々がその華麗さに目を見張る白い王城は、大陸横断街道経由でなくては手に入らない白大理石の城壁で、建築様式は前期光母教建築。五本の天を突く尖塔と、金や真珠、翡翠などをふんだんに使用した華美な様式が印象的である。

ラロナの部隊の駐屯地は、対岸にその王城を望む灯台の足下にあつた。

岬の先端、粗くしか整備されていない助走路に滑り込み、巨鳥のテールを「鳥建屋」へ入れることもせず宿舎へと急ぐ。

途中、何人かの同僚が、血相を変えて走るラロナに驚いて声をかけるが、彼女は全て無視した。二階建ての頑丈そうな石造りの建物へ辿り着くと、立哨当番なのであろう幼い少年を突き飛ばして、戦士団長室へと駆け込んだ。

質素な執務室といった室内には、豊かな草色の長髪を持つ妙齢の女性が座っていた。

海洋人であるマリースアの国『マリースア南海連合王国』の軍に所属しているため、その女性は内地の白い肌をした非マリースア人でありながら、袖無しの通気性のよい海洋民風の軍服を着用している。

彼女の名はカルダと言う。

貴族であり、またそれを示す名字を持っていた。

しかし、彼女は自分の名字を部下の前で口にしたことがない。

それは、マリースアが名字を重視しない文化だからだ。